

第12回 日本読書療法学会勉強会
「矯正教育と読書療法」
日本読書療法学会会長 寺田 真理子
2013年12月8日(日)

少年院の場合、男女ともに「少年」という用語で統一されております。文中に女子少年院の場合でも「少年」と記載されているのはこれに倣ったものですので、予めご了承ください。

今回は「矯正教育と読書療法」ということで、前回に引き続き同じテーマを扱っていきます。今日の内容ですが、今回から参加される方もいらっしゃると思いますし、前回ご参加の方も時間が経っていますので、前回の復習から始めます。それから、前は60年代、70年代の実践に続いて現在の実践のお話になってしまったので、間をつなぐ意味で80年代の実践をご紹介しますと思います。続いて、門脇高次先生という少年院の元院長先生から伺った現場のお話を参考にさせていただいた上で、現場での読書療法の実践として、奈良少年院、瀬戸少年院、福岡少年院の3つに焦点を当てて見ていきます。最後にみなさんにも簡単なワークをしていただきます。

まず、前回の資料を使って内容を復習していきます(ホームページのセミナー情報欄からダウンロードしてご参照ください)。このテーマを設定したきっかけですが、日本では矯正教育の分野で読書療法が用いられてきた歴史があります。今は絶版になっていて入手しづらいですが、『読書療法 その基礎と実際』という本に体系立ててまとめられています。これだけのことが行われていたのに、現在の読書療法に関する情報がなかなか得られないので、一度きちんと調べておきたいという思いがあり、このテーマを設定しています。

「矯正教育」そのものに馴染みがないかもしれませんが、少年院において非行少年に対して行われる教育のことです。それを理解する前提として、少年犯罪と処遇の現状をお伝えしました。事件を起こした少年たちが警察等から家庭裁判所に回されてきますが、そのような非行が年間に135,000件近くあります。その全員が少年院に送られるわけではなく、少年院に送るかどうかという審判を家庭裁判所から少年鑑別所に委ねます。少年鑑別所に送られるのが13,000人程度ですから、135,000人からかなり絞られるわけです。その中からさらに少年院に送られる少年が3,486人ということで、135,000人のうち大半は保護観察処分に終わっていて、少年院に送られるのはそのうちごく一部ということです。

このような状況なので、犯罪被害者や遺族の方からは「処遇が甘すぎる」という声があるながらもあります。少年院に入ったとしても1年か1年半という期間を終えたら社会にまた戻ってくるわけです。かなり重い罪、たとえば神戸の連続児童殺傷事件がありましたけれども、その犯人の場合は医療少年院に入って、例外的な長期処遇でしたが、それでも7年ほどで社会に復帰しています。大人であれば終身刑に相当するような場合でもそれだけ短期で出院してくるのですが、それはなぜかということ「可塑性に富んでいる」と考えられ

るからです。子どもの場合はまだまだこれからいくらでも変わっていく可能性があるのですが、少年院で教育を施して社会に返していこうという考え方が前提になっています。

「処遇が甘すぎる」という批判を受けて、厳罰化の動きがあります。たとえば、刑事処分可能な年齢を16歳から14歳に引き下げましたし、被害者に対しても、かつては自分の意見を申し立てる機会がなく、いわば無視された状態であったのが、意見陳述を希望すれば認められるようになりました。少年の処分の結果についても、以前は被害者には教えられなかったのですが、きちんと通知する制度ができました。少しずつですが、被害者側の訴えが制度にも反映されるようになってきています。

矯正教育に携わる側は、どうしても目の前の少年だけに目が向きがちな印象があります。入院当初は自分の意見もろくに言うことができなかつた少年が、きちんと自分の意見を言えるようになったり、日記にも深い洞察を示すようになったりすると、「こんなに立派になった」という成長ぶりだけを評価しがちになるのですが、被害者や遺族の側からしたら、少年が立派になったから許せるのかということ当然そうはならないわけです。少年院では平成9年からすでに被害者の視点を取り入れた教育を実施しているとのことですが、被害者、遺族の視点を抜きにして矯正教育の効果を測ることはできないと思うので、再度問題提起させていただきました。

そこで、少年院の教育でどのようなことが行われているかということ、生活指導、職業指導（社会で生きていくための技能などを身につける職業訓練）、教科指導（中学や高校の学校教育に相当する内容）、保健体育、特別活動です。特別活動では、院によってはシンクロナイズドスイミングをやっていたり、学校での発表会に相当するものやっていたり、かなりバリエーションに富んだことが行われているということをお話しました。

詳しく見ていくと、まずは個別の面接があります。教官と一対一で話をしていくのが基本になるのですが、その中で日記を書かせたり作文を書かせたりします。そこに読書指導という形で読書療法も取り入れられています。「読書指導」という名称になっていますが、実質的には読書療法がそこで行われていまして、以前は私も調べ物をするとき「読書療法」で検索していたので全然情報がヒットしなかったのですが、「読書指導」で検索するとかなり情報も入手することができました。それから内省指導、ロール・レタリング。ロール・レタリングというのは、たとえば自分が傷つけた被害者に対して手紙を書き、それを自分が被害者側に立って読んでみて、それに対する返事を自分に宛てて書きます。そういう手紙のやり取りを通して相手の立場に立つことを学んでいく技法です。実際にその手紙は投函されるわけではなく、指導教官が目を通します。他には、仏教の要素を取り入れた内観指導があったり、SST（ソーシャル・スキルズ・トレーニング）たとえば職場に行ったときに最初の挨拶はどうすればいいのか、身なりはどうすればいいのかということを含めたトレーニングがあったりします。モラルジレンマ指導というのは、判断に迷うような状況、たとえばここでお金を盗ったらいけないけれど、お金を盗ったほうが人の命を救うような道徳的に正しいことにつながる、というジレンマに陥る状況でどのような判断をするかという指導です。他にも、運動会や演劇を通したプロセス学習があったり、薬物を利用したことが原因で少年院に入っている場合には薬物乱用防止講座とか、家族の問題があ

る場合には家族適応講座とか、それぞれの個別の状況に応じた講座がきめ細かく作られています。そして、被害者の視点を取り入れた教育も重視されるようになってきています。

ここで60年代、70年代に戻って、当時の読書療法がどう行われてきたかということで、『読書療法 その基礎と実際』の中から事例をひとつ紹介させていただきました。「高度非行少年、混血児 K」という事例ですが、この少年は強姦致傷を繰り返して、家族歴を見ても祖父が犯罪者であったり母親が自殺していたり、家庭にも問題を抱えた少年でした。この少年に著者の大神貞男さんが面接をして、面接のたびに課題図書を与えました。課題図書は『家なき少女』『次郎物語』『真実一路』『破壊』『小鹿物語』『伊豆の踊り子』という、いわゆる名作ですが、これらを順に与えて読ませます。読んでから感想文を書かせて、その感想文を基に話し合いをしていくのです。「このことについてどう思ったか」とか「このときに君だったらどうするか」という話し合いを重ねて、時間をかけて読んでいきます。その結果、この少年のものの考え方、精神的なコントロール、普段の生活などが変わっていきました。読書療法の効果を測定するために、かなりの年数を経てから追跡調査もしているのですが、その後罪を犯すこともなく、結婚して子どもも育て、地に足についた生活を送っていることが認められています。このことから、読書療法は長期的にも効果の大きい療法であることが記されています。

これは60年代から70年代前半のお話でしたが、それに対して現在はどうかというと、「読書指導」という名目で行われていることとしては、まず個別指導があります。面接をして、読書感想文を基に指導していくもの。それから、先ほど事案ごとに対応する講座があるお話をしましたが、たとえば薬物乱用防止講座であれば薬物の影響などへの理解を本によって得るといったものがあります。そして、贖罪指導としての読書指導 被害者の方に罪を償うための読書指導があります。

具体例としていくつか紹介しましたが、まずレオ・レオニの絵本で谷川俊太郎さんが翻訳をした『スイミー』。魚が主人公なのですが、まわりの魚はみんな身体の色が赤いのに自分だけ黒いんです。その魚の視点に立って、「この場面ではどんな気持ちだったのか」ということを考えていく、そんな使い方をします。それから『スーホの白い馬』というモンゴルの民話の絵本を使ったものもあります。また、『淳』という神戸の連続児童殺傷事件の被害者の男の子の親御さんの手記を紹介しました。

ここまでが前回の内容ですが、詳細はホームページのセミナー情報欄から資料や講義録をダウンロードしてご確認いただければと思います。

それでは、前回の内容を踏まえて、ここからはまず1980年代にどのような実践が行われていたかを見ていきます。「交野女子学院における読書療法について」という論文をご参照ください(論文は矯正図書館のホームページ[<http://www.jca-library.jp/>]から入手可能です。該当論文を検索してフォームに記入して申し込むと、発送していただけます。以下に登場する論文についても同様です)。「当院における読書療法のシステム」の箇所をご覧ください。もともと、この交野女子学院では、読書に結構力を入れていました。読書発表会や読書集会を開催して、ある程度読書の習慣がついてきたので、もっと細かく経過観察をして

きちんと読書療法として整えようということでこのシステムができてきました。まず入院時に読書調査を行います。調査票があって、「あなたはこれまでどんな本を読んできましたか」という問いがあり、「マンガ」「週刊誌」「文学書」などから丸をつけるようになっていきます。「あなたの家にある本の量はどれくらいですか」「あなたの家で毎日取っている新聞はどれですか」という質問もありますし、『桃太郎』『カチカチ山』『マッチ売りの少女』『赤ずきん』などの昔話のうち「あなたが知っていて話そうと思えば話せるのはどれですか」「その話は誰から聞きましたか」という質問、「あなたはテレビをよく見ましたか」という生活に関わる質問もこの調査票の中に含まれています。この読書調査のほかに読書力診断テストを行い、さらに、この表には記載されていませんが MJ 式人格目録を作成します。MJ というのは Ministry of Justice の略で、法務省のことです。法務省で行われている心理検査で、犯罪を犯しやすい性格傾向に着目したものがあつたのですが、この MJ 式人格検査を行って MJ 式人格目録を作成するのです。そして『ピノキオの冒険』を読んで感想文を書きます。この感想文を見ながら、どれだけ読み取れているのか、感情移入ができていくのかということ把握します。その上で面接と読書療法についてのオリエンテーションをし、対象者を選びます。全員に読書療法を行うわけではなく、ある程度読書能力があつて、気分が安定して、鑑別所や家庭裁判所の情報によれば親子間の問題が大きい、そういう子を選んで読書療法の対象とします。

この対象選別に 2 週間ほどかかるのですが、対象が決まったら、対象者には集団療法と個人療法の両方を行います。個人療法では、夜間の日課に読書を組み込みます。ある程度の分量を読んで、自分の感想を 10 分ほどかけてノートにまとめます。そうやって毎日読んでいったものを、週 1 回対象者が集まって話をします。話し合いの後にアンケートに記入してもらいます。ペースとしては 2~3 週間で 1 冊、1 ヶ月で 2 冊ほどのペースで読んでいきます。年 1 回読書感想発表会もあるのですが、このときには読書療法の対象者だけでなく少年院の子たち全員が参加します。

中間期に入るとここに挙げられている課題図書を読むのですが、まず『有田川』は、有吉佐和子さんの「川もの」と呼ばれるシリーズのひとつです。川の流れに女性の一生をたとえた『紀ノ川』などの一連の作品がありますが、「有田川」はみかん作りに一生を捧げた女性の話です。続いて山本有三の『路傍の石』。主人公の吾一の家問題や成長を描いた作品です。『坂道』は壺井栄の短編集で、家族のことや正義感が扱われ、困難な坂道を登りきるという意味でつけられたタイトルです。この 3 作品については、苦難の多い人生を主人公が頑張っけて切り開くということで選ばれているのかと思います。『さぶ』は山本周五郎の作品で、友情をテーマにしています。『キューポラのある街』については、この後詳しくお話しします。『コタンの口笛』はアイヌの問題を扱ったもので、他者に対する共感や理解という観点から選ばれているのかと思います。

『キューポラのある街』は埼玉県川口市にある鋳物工場を舞台にした物語で、ジュンとタカユキという兄弟の成長を描いています。高校進学か就職かという進路の問題があつたり、生活の貧しさや親子関係、親の失業といった問題が扱われています。物語は 15 章に分かれているのですが、各章ごとに指導の狙いがあり、1 章ごとに読み込んでいく形で読書療

法を進めます。ここで取り上げられた章は、父親が自分の仕事に職人としてのプライドを持っているのだけれども失業してしまったということが描かれていて、そのことについて少年たちが話し合います。話し合いの中では父親について「長くやってきた仕事を捨て切れなくて、大変な仕事を30年も偉い」という理解が示される一方で、多かった意見は「タカユキの不良化は、お父さんのせい。お父さんを刑務所に入れて、たたきなおして、子どもの気持ちのわかるお父さんになってほしい」という、父親への批判でした。ところが、こうやって批判していた子たちからも、この話し合いの後でとったアンケートを見ると、「自分だったら今までの仕事にこだわらずに家族を養うために他の仕事を見つけて頑張っただろうけれども、今まで何十年もやってきたことをやめるのは確かに大変だと思う」「自分の仕事に誇りを持っていることは立派だと思う」というように、ある程度理解を示す意見が出てきます。そのアンケートの中でさらに「自分自身の父親のことについてはどう思いますか」ということを訊いていきます。物語を読むだけでなく自分に照らし合わせることを意図した質問設定になっているのですが、そこでは「自分の父親は母親とずっと喧嘩をしていて母親も家を出てしまって、自分は親と別れて祖父母と生活していてすごく父親を恨んだ。だけど当時の父はすごい博打好きだったのが、今では家庭のほうを振り向いてくれるようになったので、今ではいい関係ができていると思う」といったことが書かれています。このようにして自分に照らして考えた意見を見ていきます。

そうやって中間期の課題図書を読んでいき、出院前に再度読書力診断テストやMJ式性格検査を行い、最後に『ニルスのふしぎな旅』を読んで感想文を書き、面接をする という流れができています。その当時挙げられていた課題としては、『ニルスのふしぎな旅』はやさしすぎるのではないかとといった本選びに関する反省や読書療法の効果測定の困難さがあり、今後改善していきたい点とされていました。

この読書療法システムが現在どうなっているかですが、80年代の時点でこれだけ体系化された実践ができていたのであれば、その後課題図書をもう少し現代的なものに置き換えるなどしながら進んでいるのだらうと期待して交野女子学院に電話で問い合わせしてみたところ……読書療法は「やっていません」とのことでした。私の落胆ぶりはご想像いただけたと思います。そこで代わりにどのような本を活用しているのかをお尋ねしたところ、院の方針としてお教えできませんとのことでした。調査の冒頭から躓いてしまって私もどうしたものかと思っていましたら、現場に詳しい方からお話を伺う機会がありました。『矯正教育の方法と展開』という、前回の勉強会の基本となった本で、「読書指導」という項目を執筆された方です。現在行われている読書指導を詳しくまとめてくださっているのですが、それが門脇高次先生です。

門脇先生は主に関東地域の少年院数か所に勤務された方です。元少年院の院長というとすごく怖そうな方を想像されるかもしれませんが、現在は保育園の園長さんをされていて、園長さんというのがびったりな、すごく朗らかで気さくな方です。

門脇先生に「これだけ体系だった実践がなされていたのに、どうして現在はされていないのか」という疑問についてお尋ねしたところ、かつての少年院では今のようなカリキュラムが決まっているわけではなく、自由な時間も多かったので必然的に読書をするのが

多くなり、読書を熱心に活用する先生もいたので研究が進んでいきました。ところが1977年に個別的処遇計画、1980年に教育課程が出され、先ほど、現在の少年院で生活指導や職業指導が行われているという話をしましたが、そのようにカリキュラムが変わって、読書指導も施設全体で行う教育技法という形ではなく（全くなくなったわけではないそうですが）、少年個々の教育的ニーズに応じて行うようになったそうです。施設によっては、毎月読書感想文発表会を行っているところもありますが70年代からSSTやロールプレイングなどの各種技法が入ってきて、相対的に施設全体として読書指導に費やせる時間が減ったように感じますとのことでした。

それでは読書に対する認識自体が薄れてしまったのかということではなく、自由時間を使ってかなり本は読ませるそうです。少年院にいる1年から1年半の間に、多い子では100冊ほど読むので、読書の時間自体は確保されています。少年院では寮のホールという全員が集まれる場所があって、そこに本棚が置いてあり、図書室の役割を果たしています。そして、そこから本を持ってきて入れ替えるという形で一般的には運営しています。

門脇先生も読書にとっても力を入れていた方なので、当時の思い出深い実践についてお話をお伺いしたところ、『宮本武蔵』を活用した実践を教えてくださいました。すごく気性の荒い少年がいて、すごくエネルギーがあるのだけれどその出し方がわからない、そんな子でした。その子を見て先生は武蔵（たけぞう）を連想します。宮本武蔵は子どものころは「たけぞう」と呼ばれていたのですが、その連想から「この子に『宮本武蔵』を読ませよう」と思いつきます。「たけぞう」時代の宮本武蔵は精神的なことには関心がなく、気性も荒く、何人斬ったかで自分の価値を測っていました。当時の道場破りのエピソードがあります。相手の道場は破られたくないので、小さな子どもを大将に据えます。いくら武蔵でも、こんな小さな子どもを斬ることはしないだろうと思っただけの措置だったのですが、そんな小さな子どものことも武蔵は斬ってしまいます。刀を研ぐ職人が「お前の刀は血の匂いがする」といって研ぐのを拒否したというエピソードもあります。そんなふうになんか人を斬ることしか考えていなかった彼が最後には刀を置くところまで精神性を高めていく、その物語を読ませることで、少年も自分を変えていってくれるのではないかな そんな意図から『宮本武蔵』を読ませることにしました。何冊もある長い物語なので時間をかけて読んでいったそうですが、「今どこまで読んだ？」「あのシーンは読んだ？」「本当の強さって何だと思う？」という問いかけを先生のほうから日々しながら読み進めていきました。この少年もそうやって長い時間をかけて読み進めることで自分と宮本武蔵を同一視することができ、精神的に落ち着いていったそうです。

他にもよく読まれているのが星野富弘さんの作品です。全身不随で口で筆を持って詩や絵を描いていらっしゃる方ですが、その作品がよく読まれているそうです。また、先生は「やってみて、言って聞かせてさせてみて、ほめてやらねば人は動かじ」という山本五十六の言葉が好きだそうで、門脇先生の場合は独自に諺集などを作って少年たちによく話したそうです。

前回、少年院に入ってくる子は発達障害上の問題を抱えた子が多いということをお話しました。たとえば「3分の1」が理解できないので「窓を3分の1開けて」と言われてもで

きなくて、「どうして言っているのにやらないんだ」ということで喧嘩になってしまったりとか。また、まっすぐ歩けなくて、本人はまっすぐ歩いているつもりでフラフラ歩いているから人とぶつかって喧嘩になってしまうとか。そんな発達障害上の問題に対応するために広島宇治少年院で宇治方式という教育がされていました。とてもきめ細かい指導で、たとえば「前倣え」だったら普通は「前倣え」という号令をするだけのところを、前の人との間隔はこれくらいで、指先はこうやって揃えて、という具合に一つひとつ指導していきます。この宇治方式が矯正教育の現場で一時期とても注目を集めたのですが、それを主導していた教官が少年たちに暴行を加えていたことが発覚して大々的に報道され、現場から離れました。宇治方式は教育方式として確立されているように思われたので、この教官がいなくなった後はどのように受け継がれているのかが気になっていました。門脇先生にお尋ねしたところ、指導教官が少年たちに暴力を振ったということで、この事件が矯正教育の現場の方々にもダメージが大きかったそうです。いくら体系化が進んでいても、主導的な役割を果たしている人がいなくなると途絶えてしまうものだなと思いました。読書療法に関しても同様で、力を入れている先生がいればある程度行われるけれども、そういう方がいなくなるとだめになってしまうという状況かと思います。

そんな中で力を入れている少年院として、奈良少年院を見ていきます。ここでは朝読書が行われているのですが、「奈良少年院における効果的な読書指導の有り方について」(論文の入手方法についてはP.3に前述しています)によれば、以前から読書に力を入れてきた経緯がありました。もともと、読書感想発表会やコンクールがあったのですが、少年たちに自由に選択させると手を抜こうとして漫画を読んだりすることもあるので、先生たちが好ましいと思われるいくつかの課題図書を選び、さらに読書指導担任を決めて積極的に読ませることをしていました。たとえば立原正秋の『冬の旅』、三浦綾子の『氷点』、五木寛之の『青春の門』、壺井栄の『二十四の瞳』、武者小路実篤の『友情』などの名作が課題図書に選ばれていました。少年たちに「あなたがこの少年院に入って読んだ本で印象に残ったものを挙げなさい」「あなたがいちばん役に立ったと思う本を挙げなさい」というと、この課題図書の作品名が挙がります。少年たちにも一定のインパクトがあったようですが、その一方で「課題図書を読むのは苦痛ですか」という問いに70%が「苦痛だ」と答えていたり、「課題図書の感想文を書くのは好きですか、嫌いですか」という問いにも88%が「嫌い」と答えています。感想文を書く際の課題図書も、『走れメロス』や芥川龍之介の『鼻』『蜘蛛の糸』などなるべく短編を選んで、手を抜こうとしていたそうです。当時収容されていた少年たちの読書能力に対して課題図書が難しかったということもあつたらしく、課題図書が役立ったり心に残ったりしているけれども、うまく機能しているかというところまでは至っていないという状況でした。

そんな歴史を踏まえて、「読書指導～朝の読書導入による一考察」(論文の入手方法についてはP.3に前述しています)を基に奈良少年院の状況を見ていきます。まず、収容人数が増えて衆情が悪化したという背景がありました。そこで空気を落ち着かせるために読書を活用できないだろうかということで、朝読書の時間が作られました。毎朝20分間と土曜日

の午後に 1 時間読書をするのです。朝読書は基本的に読みたい本を読んで感想文などは課さずに好きに読ませるものですが、全国の大半の学校で導入されています。

第 10 回日本読書療法学会勉強会でも、朝読書を取り上げています。江戸川区の学校には「読書科」があり、読書を積極的に行っているところが多いのですが、そこでも朝読書が行われています。朝読書によって、やはり子どもたちの気持ちがすごく落ち着くそうです。以前は、家で喧嘩をしたり、バタバタしたりして学校にくと、落ち着かないまま授業に入ってしまったのが、読書の時間をとることで一旦クールダウンして授業に臨めるので、子どもたちの集中力も高まったということでした。中には落ち着きがなくて教室を出て行ってしまう子もいるのですが、そういう子が校長先生の部屋に遊びに行くと校長先生も朝読書をしていて、その子に本をいろいろと見せてくれます。それを読んで落ち着いてまた教室に戻っていくそうで、落ち着きのない子にも朝読書の効果が見られるというお話でした。

奈良少年院でも空気を落ち着かせようということで朝読書の取り組みがなされるようになったのですが、そのアンケート結果が掲載されています。表 1 は少年院に入る前に読書の習慣があったかどうかですが「いいえ」が 75%とあるように、大半は本を全然読まずに来ています。本を読まない中高生は多いですが、その一般の数値と比較してもかなり高い数値になっています。さらに表 2 で少年院に入る前の読書についてのイメージを尋ねていますが、「面倒くさい」「字が苦手」「興味がない」「読んでも無駄」というイメージが多いのですが、それが朝読書によって表 3 にあるように「楽しい」「面白い」「あれば読む」「勉強になる」というふうに変ってきます。さらに、朝読書を通じて変わったこととして「自然に本を読むようになった」「落ち着く」「楽しい」「勉強になる」「すぐに 20 分が経ってしまう」というように、朝読書によって本に対する態度がかなり変わってきたことが伺えます。読む本も小説や歴史物が増えるなど、入院前に比べてジャンルも変わってきています。

朝読書の導入は 2001 年でしたが、これがその後個人指導にどのように結びついているのかについて奈良少年院に問い合わせ中です。情報が入り次第、追ってフォローアップさせていただきます。

(追記：以下のような質問を奈良少年院宛てにお送りし、下記のご回答をいただきました。)

1. 朝読書の導入当時は午前 8 時 30 分から午前 8 時 50 分までの毎朝 20 分間と土曜日の午後に 1 時間という時間が設定されていたようですが、現在も同じように行われているのでしょうか。
2. 対象者は全員でしょうか。
3. 読書能力に問題がある少年への個別対応はなされるのでしょうか。
たとえば、発達障害の観点からの支援などは行われているのでしょうか。
4. 選書は各少年が自由に行うのでしょうか。

- 5 . どのような本がよく読まれているのでしょうか。
- 6 . 導入当時の目的は衆情の安定ということで、読書療法的な目的はなかったそうですが、その後、朝読書を個別の読書指導に結びつけていく様な取り組みはあるのでしょうか。
- 7 . 導入当時に比べ、各種のメディアの発達により読書離れが進んでいるのではと思いますが、そのような傾向は感じられますか。その場合、朝読書への動機付けはどのようにされていますか。
- 8 . 導入から 10 年程が経過していますが、この間にまとめられた記録や論文で公開可能なものがございますか。もしあれば、拝見したく存じます。
- 9 . 朝読書によって少年に変化が感じられたという、印象に残るエピソードがございましたらお伺いしたく存じます。

読書指導について 奈良少年院のご回答

質問事項1～7について

1 目標

- (1) 読書の時間を設定することにより、一つのことに集中する力を養う。
- (2) 沈黙の時間を持つことにより、心情の安定を図る。
- (3) 読書を通して、先人の考えを学び、今の自分を見直すきっかけを与えることにより、社会生活を営む上で必要とする基本的な知識や心構えを養う。
- (4) 自分自身の将来の生き方、望ましい青年としての生き方等への関心を深めさせる。

2 対象者及び実施期間

全少年を対象とし、週間日課表に基づき、毎朝及び土曜日午後の読書の時間を中心に行う。

3 指導目的

(1) 毎朝の読書の時間

- ア 時間が短いため、集中力を養う事を主目的とする。
- イ 一日の始まりの日課であり、心を落ち着けてその日の日課に取り組む心構えを持たせる。
- ウ 本内容及び読書量は問わず、短時間で意識を切り替え集中させるようにする。

(2) 土曜日の読書の時間

- ア 1時間と時間にゆとりがあるため、じっくりと読書に取り組みせ、興味の幅を広げ読書に親しむ習慣を付けさせる。
- イ 落ち着いて読書に取り組むことにより、健全な余暇の過ごし方のひとつとして読書が位置づけられるようにさせる。

4 指導上の留意点(動機づけ等)

- (1) 設定された時間はとにかく読書だけに集中させることとし、他のことをさせないように留意する。

(2)まだ読書に対する興味の低いうちは、読む本の指定はあえて行わず、集中して本を読む習慣を身につけさせることを目的とする。

(3)自ら読書に興味を持つ段階に到達すれば、課題図書等の指定を行うようにし、より興味や思考の幅を広げるようにさせる。

(4)視力の悪化や腰痛等を招かないよう、本と目との適切な距離や姿勢について、適宜助言。指導を行う。

質問事項8、9について

記録、論文等はありません。

少年の変化については、学習効果としては、漢字を覚える効果、思考能力の向上が言えると思います。(具体的に検証していません。)

内面の変化は、心情の安定が大きく、また思考の幅が広がり、冷静に物事を考えるという姿勢が養われていると考えます。しかしながら、読書指導だけの効果として取り上げるのは、少々乱暴かと思えます。読書指導は、少年院の教育の中で日課として組み込んでいるものと自由学習時間に少年が自由選択で取り組むものがあります。また、知的能力の格差が大きく、図書の選択は、絵本から文学小説、各専門書まで、その範囲は広く、指導方法も異なります。

収容期間が長い少年は、長編小説を読むことがしばしば見られますが、読破しようという目標と、時間の経過を確認する手段としているところも見られます。

以上が現状ですので、ご推察くださいますようお願いいたします。

次に瀬戸少年院を見ていきます。瀬戸少年院にも奈良と同様に問い合わせをしています。が、まだご回答がないので、2001年当時の贖罪指導について見ていきます。

贖罪指導としての読書指導は『矯正教育の方法と展開』にも書かれていますが、その中から文献リストと設問例を配布していますのでご覧ください。課題図書リストにあるのは『少年リンチ殺人事件「ムカツクからやっただけ」』『淳』『少年にわが子を殺された親たち』など、遺族の手記や被害者側の思いをまとめたものが中心になります。これを読んで感想を書くのですが、それにあたって設問作文例があります。たとえば『少年リンチ殺人事件「ムカツクからやっただけ」』であれば「この事件が起きた直接の原因はどこにあると思いますか」「君がその事件の現場にいたとしてその場を止めるために一番良い方法を考えてください」というように、参加している少年たちも当然何らかの事件を起こしているわけですから、自分だったらどうするかということを考えさせる設問になっています。「被害者の宮田稔之君の無念な気持ちを君が代わって書いてみてください」という設問がありますが、これは先ほど少しお話したロール・レタリングにつながります。自分が被害者に宛てて手紙を書き、今度は自分が被害者の立場になってそれに対する返事を書くというロール・レタリングと結び付けられます。そのように他の技法と組み合わせたり、少年院を出てから被害者のもとにお詫びをしに行くというシチュエーションを想定して、そこまで踏まえて考えるような、そういう贖罪指導の一環として読書指導が行われています。ただし、この

贖罪指導はとても慎重に進める必要があります。というのは、贖罪指導を進めることでどんどん自分のやったことがわかるようになってくると、自殺を図る少年が出てくるからです。自分のやったことに耐えられなくなってしまうのです。だから、どのタイミングで贖罪指導を行うかについては現場で慎重な判断がされています。

「このリンチ事件の現場をできるだけ想像して描いてください」という設問もありますが、このようにただ文章を描かせるだけでなく絵を導入する取り組みというのが、他の少年院でも行われています。

読書感想画を使った取り組みということでご紹介したいのが福岡少年院です。読書集会和読書感想画という取り組みがされています。毎月、ディレクターと呼ばれる職員が中心になって読書集會を開催します。1ヶ月かけて入念に準備をした上で、当日は3~4名のボランティアにお手伝いをしていただきます。ボランティアは地元の読書会のメンバーなど本好きな方々です。本選びに際しては、「内容は深くても難しすぎないもの」という基準で選びます。実際にこれまで使われた本として、乙武洋匡さんの『五体不満足』という自分の体験を綴ったものや、大平光代さんの『だから、あなたも生きぬいて』があります。大平さんは14歳でいじめを苦しんで割腹自殺を図るのですが、命を取り留めます。その後もやくざの組長の妻になったりしながらも、最終的には勉強して弁護士の資格を取ります。その体験談をまとめた本でミリオンセラーになりましたが、このように当時話題になったものも幅広く取り上げられました。事前準備として、読書会で扱う本を少年たちによく読ませます。読書指導教官が「何回くらい読んだ?」「どういうところが気に入っている?」「あらすじはちゃんとと言える?」という具合に確認していきます。当日の進行役であるディレクターの先生も当然十分に読み込んだ上で読書集會を開催します。

読書集會ではまず少年たちに自己紹介をしてもらい、本についての感想、特にどういうところが良かったのかを一人ずつ言ってもらいます。その上でボランティアの方々を含めて「このシーンについてどう考えますか」といった質疑応答をしていきます。紅茶を配るなどしてなるべくリラックスした空間を作って行うのですが、それでもなかなか意見が出なかったそうです。「どう思いますか?」と言われても表面的な答えに終始してしまい、ディスカッションにならないのです。少年院という空間の性質上、どうしても「間違っただことを言うてはいけない」とか「何か言ったら自分の採点に影響してなかなか出られないのではないか」という思いが拭えないそうです。

どうやってディスカッションを活性化できるかと先生方が悩んでいたところ、ある先生が見つけた『木を植えた人』という本がヒントになりました。これは『木を植えた男』という絵本にもなっているのですが、この絵本のように、『木を植えた人』を読んで、その感想画を少年たちに描かせることにしたところ、大きな変化がありました。というのも、この感想画がかなりバリエーションに富んだものだったのです。あるシーンをそのまま絵に描いたような感想画もあれば、全部読んだ上で自分なりの世界観を描いた感想画もあり、本の中には登場しない、物語のずっと前の過去や未来を描いた感想画もありました。幅広い感想画が出てきたことで、少年たちにもインパクトがありました。お互いにずいぶん違

うということ把握したり、話すのは苦手けれども絵は結構得意な子もいるので、「こういうふうに絵が描けるんだ」ということがわかったりして、ディスカッションが活発になっていきました。この読書感想画の取り組みは成功したと言えるのではないのでしょうか。

実は、他の少年院でも読書感想画が取り入れられています。神奈川の医療少年院での取り組みで、これについては「矯正施設における読書指導」という論文で触れられていますのでご参考になさってください（論文の入手方法はP.3で前述しています）。読書をして読書感想文を書くのが難しい知的障害を抱えた対象者もいるため、読書感想画を活用しています。年に1回感想画の発表会をしたり、感想画の展示をしたりしているのですが、読書療法といえるまで体系化されてはならず、取り組みとしてはまだ始まったばかりのことでした。

また、岡山の少年院でも読書感想画が取り入れられました。最初は読書感想文だけだったのですが、そうすると少年たちの中には「感想文慣れ」してくる子が出てきて、「こうやって書けばうまくまとまるだろう」という表面的なものが増えてきました。これでは意味がないので、感想文に加えて感想画を描いてもらうようにしたところ、変化がありました。少年の内面とすごくリンクした絵が出てきたのです。日常生活であまりはっきりものと言えない子が、やはりそれらしい絵を描いていた。それが、継続して取り組んでいくことで絵にも変化が現れ、その変化が日常生活の変化ともリンクしていたので、少年の内面を見ていく上で有効な取り組みだったという報告がなされています。

福岡少年院の話に戻りますが、この読書集会をぜひ見学したいと思って問い合わせたところ、先月を持って終了してしまったそうです。というのは、法改正によってカリキュラムがかわり、生活指導に割かなければいけない時間が増えて、読書にかけられる時間が減ってしまったそうなのです。

読書に関する取り組みを多くしていただきたいと思い、福岡少年院の次長さんにお話を伺ったところ、以前は法務省矯正局主導で読書感想コンクールや読み聞かせ、輪読会なども行っていたのが、予算の問題もあり、整理されてきたかもしれません。ただ、現場の先生の中にはもっと読書が必要ではないかと思っている方々がいらっしゃいますし、読書の効果自体はすごく実感されています。少年院に入っている間、一人でいる時間も活字にのめりこむ少年が多いのです。先ほどの奈良少年院のアンケートでも入院前は本を読まなかった子が75%という数字がありましたが、入院して初めて本を読んだという子もいます。入院すると国語辞典を一人ずつもらうのですが、ここで初めて辞書を引いたという子も多いそうです。なかなか個別指導という形で先生は時間を割けないのですが、自分で辞書を引きながら少しずつ本を読んでいきます。入った当時は日記を書かせても1ページも書けないそうです。ひらがなしか書けないとか、言葉が出てこないとか。そういう子たちが、多い子だと1年で100冊、少なくとも50冊は本を読むので、出るころにはかなり漢字も豊富になるし、日記も何ページも書けるようになる。読書によってそれだけ成長したということを先生も言われていました。出院時に面接があるのですが、そこで必ず聞くのが「君の印象に残っている本は何ですか」という読書にまつわる質問です。

この次長さんは図書に力を入れている方で、お薦め本100冊をまとめて推薦セットとし

て置いて定期的に入れ替えているそうです。少年たちがどういう本を読むかという、親からの差し入れも多いので、新聞で広告が出ているような、「本屋大賞受賞」などの売れ筋の本に飛びつくことが多いそうです。人気が高いのは東野圭吾さんの『手紙』などです。好んで読まれるのは、自分の体験と重ねられるようなものです。マイナスな経験をしたけれど、そこからやり直しができたというドキュメンタリーです。先ほどの『五体不満足』や『だから、あなたも生きぬいて』の路線ですね。あとは、生き方や考え方が楽になるようなエッセイ。「少年院.com」というサイトがあって、少年院を出た方が管理・運営して全国の少年院の情報が掲載されているのですが、その方も自分が読んだ本を何冊か掲載されていて、自己啓発的なエッセイも挙がっていました。考え方を考えるきっかけになるような本が読まれているのですね。

実は、法務省で以前出した指導要綱の中にいくつか課題図書も挙がっているようなのですが、山本有三やオー・ヘンリーの『最後の一葉』、モンゴメリの『赤毛のアン』などのタイトルが並ぶものの、それが寮の図書室には置いていないというミスマッチが起きているそうです。指導要綱が古くなってしまい、現場の状況とのミスマッチが生じているのですね。ただ、指導要綱にある本がまったく読まれなくなったかというとはそうではなく、少年の中には『赤毛のアン』を読んですごく良かったという子もいて、響く子にはちゃんと響いているのですが、全体として古いために少年たちが今読みたいものとかけ離れてしまっています。次長さんの場合は、図書館から情報をもらったり、女子少年院から推薦図書のリストをもらったりして、ご自分でリストを作成されているとのことでした。

今日の内容には取り上げていませんが、いくつか女子少年院の論文を見ていたところ、童話や絵本を使った指導がありました。『海のおばけオーリー』などを読ませたり、読むだけでなく自分で絵本を作らせる指導もありました。絵本を作ると聞いたときには、少年たちは「絶対無理」だと思うのですが、励まし合いながら作っていくと、「以前は気持ちのコントロールができなくて他の子をいじめてしまっていたのが、コントロールできるようになった」というお話など、動物に自分の気持ちを託してその変化を描いたものを作ってくるようです。また、『乱神』という小説を使った指導もありました。自分の家の中が殺伐としてきたのをきっかけに、それまで仲のよかった友だちをいじめるようになったけれど、その友だちのほうはいじめられても今でも友だちだと信じている。そんなお話を軸に、少年たちに「自分だったら誰にいちばん共感できるか」を話し合ってもらおうのです。

女子少年院からも情報を得て、福岡少年院の次長さんは図書環境を整備しているのですが、親から差し入れられる本には、いい本もあれば「どうしてこんな本をわざわざ差し入れるのか」という本もあるらしく、少年院側で図書をきちんと整備していかなければという意識を強くお持ちです。以前のように矯正局から、毎年お薦め本リストのようなものがあればすごく助かるというお話をされていました。そこで、日本読書療法学会として少年たちに読んでほしいようなお薦め本リストの作成ができないかと考えています。「矯正教育と読書療法」のテーマを扱うに当たって、現場での実践を集めてハンドブック的なものができれば現場の先生方のお役に立つのではと思っていたのですが、現場のお話を伺っていくと、読書指導という形で新たに読書に時間を割いていくことは正直なところ難しいだろ

うと思います。けれども普段の取り組みの中で読書を活かしたいという先生方の声があるので、何か参考になるものを提示できないかと考えています。単なる書名の並んだ図書リストではなく、少年のインタビューとか、その本の何がよかったのか、現場の先生はそれをどう使っているのかといった情報を含めたブックガイドにできればと思います。私がこの学会を創ったきっかけは、自分自身が読書によってうつから回復したことでしたが、そこで学んだこと、つまりロールモデルを持つことや自分の気持ちのコントロールや考え方を变えることは、矯正教育にも通じるものなので、結構近いものが選べるのではと思います。そこで、みなさんにワークをしていただきたいのですが、みなさんだったらどんな本を図書リストに入れたいと思うでしょうか。その理由、その本から何を学べるのかも書いていただけたらと思います。

(以下、ご記入いただいたアンケートの内容です。参加者の方にお話いただいた内容は、人によって録音状態の差がありましたので、ご記入いただいたものをお名前を伏せて転載する形にしております。)

書名：『なぜウソをついちゃいけないの？ ゴットフリートおじさんの倫理教室』

理由・学べること：思春期だった私でも反発を覚えることのない文体で善悪の「何故」について一緒に考えていける本。納得を与えてくれる本。

書名：『あかね色の空を見たよ 5年間の不登校から立ち上がって』

理由・学べること：不登校になってからのやるせない気持ち、でも親に申し訳ないという気持ちに素直に共感できる。そんな作者でも何とか立ち直ったという話を読むと、自分と重ね合わせることができないのではないか。

書名：『自閉症裁判 レッサーパンダ帽男の「罪と罰」』

理由・学べること：他者理解、法制度の限界（責任能力とは？）

書名：『よだかの星』

『猫の事務所』

理由・学べること：大人の世界のいじめについて考える。

書名：『ライ麦畑でつかまえて』

『フラニーとゾーイー』

理由・学べること：十代後半の悩みや日々について。

書名：『4 TEEN』

『池袋ウエストゲートパーク』

理由・学べること：十代前半の悩みや日々について。

書名：『心霊探偵八雲』

理由・学べること：犯罪者の父から生まれた自分の境遇と闘いながら、様々な事件に巻き込まれていく。

書名：『「折れない心」をつくるたった1つの習慣』

『「カチン」ときたときのとっさの対処術』

『「いいこと」がいっぱい起こる！ ブッダの言葉』

理由・学べること：ネガティブな感情を持った時コントロールがしやすくなる。犯罪は自己コントロールができるかできないかがポイントとなる。セルフエスティーム、自己肯定感を高める本がよい。

書名：具体的署名は思いつかないしわかりませんが、「贖罪指導用の図書」を慎重に選び、慎重に教えながら読んでもらう。

理由・学べること：本を読むことにより自分を追いつめ、自殺を考える少年もいるとのことですが、それくらいまで自分を追いつめないと、なかなか立ち直れないものです。

軽度の犯罪の少年たちにも前向きな内容の本とあわせ読んでもらうべきだと思います。

書名：『クリスマス・キャロル』

『そして父になる』

『麒麟の翼』

理由・学べること：環境や親や他人のせいにしてしまったりしがちだけど、親も学び続けている一人の人間。家族という分野において信じるということ、お金では代えられない物やこと、正直さや愛について、誰もが体験する失敗してから気づけること、そしてそこからまた未来へ向かって進んでいくこと、進んでいかなければいけないことを教えてもらえる。

ありがとうございました。やはり、お一人ずつ出てくるものが違うので参考になりました。私もお持ちしたのですが、それは『あなたがもし奴隷だったら...』という本です。先ほどご紹介した『木を植えた男』の版元である、あすなろ書房から出ています。奴隷制度について描いたものですが、絵がすごくインパクトがあるんです。冒頭で奴隷たちが船で運ばれているのですが、弱った者や死んだ者がどんどん海に投げ捨てられるさまが描かれていたり、荷物のように重ねられて運ばれるさまも生々しく描かれていたりします。そして、絵だけでなく、言葉も響くものが多いです。たとえば「わたしの主人はわたしを知っているおつもりだ。けれども、わたしにとって何がいちばんつらいことなのか、そんなことも知らなくて、わたしを知っているとはいえない」という具合に。人の身になってとか、

他人の立場で考えるというのはなかなか難しい部分がありますが、これだけインパクトのある絵柄で描かれると印象に残ると思い、これを選びました。

他にも共感とか自己啓発的のところや贖罪指導とかを含めて、ある程度系統だったリストとしてまとめて矯正局に提案したいと考えています。1年くらいかけていろいろな現場を調べて、という気の長い話になると思いますので、またある程度まとまったところでフィードバックしたいと思います。

次回の勉強会は2月23日(日)に「読書療法ガイドブックを読む」のテーマで開催します。第8回日本読書療法学会勉強会でイギリスの読書療法を取り上げましたが、その際にアメリカの団体で読書療法と詩療法をやっている団体に言及しました。その団体が読書療法をどう行うかとか、その意義をまとめたガイドブックを出しているのですが、その内容を一緒に学んでいきます。

それでは、また次回ご一緒できるのを楽しみにしています。本日はありがとうございました。